拾弘

新智恵海

智

洋学文庫
文庫8
D 400

新智恵海序

物ものを始めて人ふるきを従て新を得る是刑名の霧論也。予
曰ク鄴侯黄籙萬卷ハ世間秘書なり。只耳剽乃ち人を失
ふことを恐て。雑事ハ僧巧

文庫8
D 400
010190618019
41- 7166

まゝに記して居るの便なり。是
編述者纂集する所の諸書を
見るといへども。事を異にする乃不揃なる
を撰び。旨趣已に備はり。更に新
なる説を得たりと雖。享保甲辰
中夏日蘭井政武書

拾玉新智恵海巻之上目録

一 長く継ぐる紙をつぐ時。糊付やうの法 六丁メウ
一 扇風 鉸具 玄造化なる法 同ジ
一 湯白洞の道具 磨やう 六丁メウ
一 磁器類を拓に入て写す法 七丁メウ
一 写真 彩生 絵模へやうの法 同
一 象牙 麻角等一切貝類を摸くさう 七丁メウ
かゝの法
一 松柏を活す法 八丁メウ

一婦人鉄漿を付て落ざる法　八丁メヲ
一人の逃走るを留る術　同ウ
一家内の鼠を除る法　同
一弩成子螢火虫の法　同
一蚤衆寝ざれども眠らぬ術　十丁メフ
一闇夜より眼見る法　同ウノ
一食せざれども不飢方　同
一ある不渇茶　同
一喉乾ぬ法　十一丁メヲ
一暑氣より中らぬ法　同
一轡をみづ死て蘇ぬ法　同ウ
一みづ死る矢の根蘇るよ蘇法　同
一藍染乃布を白くなす法　同
一銀箔いつまでも蘇ぬ押やうれ伝　十二丁メヲ
一ちやん塗れ秘方　同
一ちやんを合ずよ汁やう　同ウ
一ちやんよて名の塗やう　十三丁ヲ
一合ずよ引油の法　同反

一黄栢山梔子丸衣服ヨ付ル虱ヲ落ス法　十四丁ウ
一白粉二斗白帷子ヨリ血ノ付ルヲ落ス法　同
一武具ヨリ出穴アケルヲトメ粉　同
一衣服ヨリ油ノ付ルヲ落ス法　同
一漆ヲ久敷ル法　同ウ
一瘡器敷ケルヲ落ス法　并ニ疣ヲ落ス法　同ウ
一雷ヨリ中ル死シタル人ヲ甦ス法　同
一雷ヨリ触レ全身痿テ正気ナキヲ救フ　十五丁ウ
一雷ヨリ中シタル法　同
一餅ヲ喉ヨリ詰テ死セントスルヲ救フ　同ウ
一藁草ノ代ヨリ用ユル仕ヤウ　同
一瓦山ヨリ木ヲ生ス法　同
一砂時計ノ作リ方　十六丁ウ
一箒盤掃帰位凡ソ作リ方　同ウ
一連環法　穴ヲ人ヨリ抜テ壊セ。此文字なりとさす　十九丁ノ
一烟草ノ脂ヲ付ルヲ落ス　十丁メウ
一山椒ヨリ むせるヲ治する方　同
一蚊ノ亂穴ヲ塞ギ再ビ明ル法　同ウ

一 硯石并ニ盆山よする石其他出来ひづみを
ためて墨すなるぬ拍よ墨すり仕やう 十二丁メヲ
一 塗拍よ紙を張糊ノ法 同ウ

拾玉新智恵海巻上目録 終

拾玉新智恵海巻之上

○継紙よ糊付やう

一表裏紙帳などを拵よ横幅を極め紙を継る事ハ
がゝし。竪へ継かくる紙長くして糊付
継ゝる紙よ丸くくと巻下よりつき出し

紙を延すれバ糊むらゆゞかく付なり下よりつき出す時糊と付る分ハ廣狹ハ濃ゝを

すべし。下の湯のごとく法へし

○屏風鉸具造化なる法

一屏風鉸具考乃仕やうハ厚紙と合せ裏幅拡よ裁合せ表方参差よ付る也。然れども剪ざる人ハ紙よひづこ出来てそうつゞいゆゞしりの也。

玄造化なる法ハ屏風を張立てそうつゞいをべき時厚く強紙と屏風の長ひどよ継それを竪よ屏風のかゝよ半分はさみ

如湯よして広く引出る紙を屏風れ表方へ糊よてつけ。他屏風のこぐらよハ糊と付べし。扨此屏風はてそうつゞいの面を裏表へ寄返し。

此時屏風の内へ如湯よして広く引出る紙をそうつゞいよ切離し二枚を糊よて合せ左右へ差よ張付べ

巻はさこ玉べし。乾ハてうつぐいと曲よ
きさめなり。如式して上を幾遍も巻めとく
張てうつぐいと切べし。但し裏表同しかどよ
張るがよし。てうつぐいの上と張度毎ゝ弓へ
右の紙二文匁の紙と入て上下を□如式板よて
はさみ張べし

○錫白銅の道具磨やう

一右くろうなりうる湯白銅ハ器ハ稲苗の
陰干よく磨べし。器しらなく新くろ也

○鉢皿茶碗抹の瓦器ハ入て遠方へ
出に仏ハ抹ハ
一瓦器抹ハ入るよ抹つめ亜ろも反中よて
動き。或ハ抹と落して損ずるあり。皿
茶碗抹と一所ずつ反右よ包。其上を数遍張
て重。抹よ入茶よてつめるよしあ過て
落し。抹破る時も瓦器損ずるなし
○書見抹生絵梅やうの仕
一書見抹よ好よまる色漆よて絵書。其裏

を漆にて塗る。漆乾くる時、生柿をむき下
ろすと水にて浸し、此柿漿に右の貝を漬る。バ
貝和らかくなり。其時細き小刀にて紙を切るく
摸柿と自由に裁きよくなり

○象牙・鹿角等一切貝類に摸やう

くさらかしの法

一角類貝類にも右のごとく漆にて絵を書く漆
乾きさる時、むき柿に漿に三日ばかり浸し
置て出し、紙をみがき洗ひ、漆にて書する

而素く摸やう出来るものなり

○松枯るを活す法

一松枯んとせバ川芎を煎じて根にそゝぐべし
忽枝葉茂るものなり

○婦人鉄漿を付て高ざる法

一柘榴皮　檀の實　二味等分粉にし
鉄漿を付て此茶を歯に塗べし。光澤あり
て久しく落ず。又鉄漿にて染りうぬる歯に
ハ始に此粉茶を付て後鉄漿を付べし

粉茶を塗べし。広茶よてよく齒を固 蛭

よもよし

○人の逃走るを覆る術

一其逃走る人の衣服よ磁石を包并の中へ懸置べし其人自反也 見淮南萬畢術

○家内ね鼠を碎る法

一蟹を乾て粉よし黑犬の血よて煉るさめ火よ焼へし。家内の鼠盡く碎るゆなり

○腎成子螢火丸の法

一広方諸の疾病を碎一切の妖怪、邪氣、虎狼、蛇蜂等の諸毒よ中らず。軍中白刃引箭ね難盗賊の害を除く。昔漢の冠軍將軍武威太守刘子南といふ人。尹公といふ道士よ広方を受得たり。永平十二年北界よ於て虜賊と戦て刘子南が軍敗士卒略奪られ刘子南敵よ囲れ四方よりも矢を射ることあまたし。然れども其矢刘子南が乗るるより数丈を隔て地よ墮。一節も身よ中ずず。後よ

と道れ云。虜賊多驚て神なりと思ふ甚深
刈子南山方を子弟より教ゆ。皆軍中に大功と
なりて嘗傷を被ず。漢の末より青牛道士山
方を得て皇甫隆に伝ふ皇甫隆是を魏の
武帝に伝ふ。一名冠將丸又ハ武威丸と名く

螢火　鬼箭羽　蒺藜　各三文
雄黄　雌黄　各二文　羚羊角　一文
白礬　焼て二文　鐵錘柄　仙人鉄　焼焦一文
右細末　雞子黄　丹雄雞冠血にて

煉合せ杵にて千斗よく搗て杏仁の形に
三角に丸し絳嚢に入て常に左の臂
の上に括付置べし。軍中にハ腰に繫ぐ家門に
居ハ戶上に掛置べし。盜賊を碎て害な
右神仙感應篇に出たり

○狸の寢ざれども眠らぬ術
一鶏の尾黑焼にして水にて解。脚にへと
帝にて糊をして張置べし。是神仙の
奇妙の法なり

○闇夜ニ眼見ぬる法

一梟ノ羽を黒焼ニシ粉ニシ。草の汁ニて解て眼ニ付れハ闇夜ニ眼見ぬるなり

○食せざれども不飢方

一胡麻　唐棗　寒晒餅米　各等分

右粉ニシ蜜ニて○丸ごとニ丸じ。一日ニ三粒づつ用ゆべし

○ろ不渇茶

一五茶　蒲萄　蓮白梅　各等分

右粉ニシ蜜ニて○丸ごとニ丸じ一日ニ三粒づつ用ゆ

○喉乾ぬ法

一蒜を咬て梟ノ穴ニぬきバ喉乾ずなし。

右中ニハ麻を乳をふせぐなり

○暑氣ニ中らぬ法

一紫天の帝道を行ニハ艾葉を脇の中ニ入其上を下帯ニて志めて歩ミ行ベし暑氣

あてられず。霍乱をせず。腹痛ず

○蕎をみぢ丸至て淡ぬ法

一蕎を淡ぬ至やうハ小麦菜ハ丸ハ温飩粉

二色を等分よ合せ。蕎を筋よ入。右の粉ゑて淡至

べし。いつまて至てもさびず

○みぢ丸ゐ矢の根を淡ぬやうよ至法

一米粃を炒て淡よ入。其中へちゝ込至色し

いつまて至ても淡ぬなり

○藍染丸抱を白くなす法

一釜よ湯を沸し。其中へ米の粃を入煮れバ

白く落ちなり

○根笹いつまでも淡ぬ押やう丸法

一笹下よ鶏卵の白をぬりて其上よ根笹

を押べし。いつまでも淡ぬなり。又根笹丸上ゐ

鶏卵の白ことを引もよし

○ちやん塗丸秘方

一胡麻油 但しまぢこかき 其外 炭火よ藁をゐけて燃し火氣を和らゐ

て先油ぬりと煉ものを幾なくありて油かたまり
初ぬり幾度て。初めぬ時より油のあしおりく
かゝる時、油をたゝしさましてをき

蜜陀僧よくあらを十匁 油の中へ。よくかき
まぜ。又炭火にかけ。竹箆にて油動なくかき油ハ
し。一時ばかり煉てさ法しをくべ。かきまぜ
よ油動あれば蜜陀僧こげつくなり

○ちやんを合孤よりひやう
一絹布 木綿ならば漆刷毛のこえ死をんて先

合孤ハ裏より然すり付べし。表ハ裏ハ油初
ちゝる度よ毛立てあし。裏より引かして
後よ表へ引なり。裏より一返ぢ引てよし
十日よりて干るなり。風吹埃乃かゝらぬ所よ乾
なり。油を絲よて合孤二所ゑ引べし。油ハ胡麻
油の方よし。なくハ荏ゑ油よし

○ちやんよて器の塗やう
一箱或ハ桶よても塗附ハ油煉加減。考よぬか
上塗漆の加減よ煉塗物よりゆのべんも念を

八深して塗なり。叔埃の叮らぬ而ヨ日ヨ手
なり。下地を出ヨて深きハ黒く次なり。玄蕎
塗ヨハ黄栢をせんじ色ヨて深かして其上を
塗なり。赤くするヨハ蘇枋ヨて深其上を塗なり

○合物ヨ引油の法

一荏油 壱升　定粉 拾匁

右調合してかれ茨引べし。土ハ底ヨ溜り
てあを上の油をかり引なり仏油ねばらすし
くよし。傘 灯燈ヨもかべし。あらばらず

して よし

○黄栢 山梔子 衣服ヨ付ると落法

一梅酢ヨて濯へし 落るなり

○白物二種 白帽子ヨ血の付ると落法

一食とつぶして洗へべし。粘と上へ塗亜もよし

○武具ヨ虫穴あけ入るをこめ法

一粘ヨ硫黄押まぜ穴へ入其口をむぎ漆ヨて塗へべし

○衣服ヨ油の付るを落す法

一あを壱升ヨ塩壱合入練へ煮立てゆ壱沸し

油の付こゝろ而をすぐ色ー

○混を久変色法

一渋 を絲ゝ熟れ為ゝ絲乃傷りニ入くべ

○磁器数飲ゝるを落ゝ法 并ニ穴をふさぐ法

一焼物の飲ゝるハ砥の粉を漆ゝてかくこね

を入て張ゝべし 物其色ゝ意じゝる絵の

具を漆ゝ合せぬるなす。磁器数ゝ穴の内

ゝるをふさぐも色ゝ同し

○雷ゝ中て死しゝる人を甦 法

一雷ゝふれ忽く薫死しゝるゝハ速く其人を

横ゝ卧しめ。炬火を點し。其人ゝ火氣を中

べし。其忽ち火氣をあて。忽ち去年て甦也。

過てかしもあをかけハ死るなり

○雷ゝふれ全身瘡て毒氣なきを救ゝ

一降真香を火ゝ焼て全身を薫へし甦なり

○雷ゝ中らぬ法

一紫菱香を懐中すべし。雷ゝ中ゝ沢。又雷ゝ

鳴時紫菱香を焼べし。其色へハ雷不落

紫蘇香ハ降真香の家上するりのそ法也

○餅を咽ノ喉ノ詰て死せんとする時ハ

一餅を咽ノ喉ノ詰て死せんとする時ハ急ノ酒を温めて其

人乃鼻へ吹込べし。然る時吐出して活

○藁蒐代ノ用ゆる仕やう

一黄の穂をとり。皮を去て茅を低るべし。書畫

玄妙乃筆勢あり

○瓦山ノ木を生す法

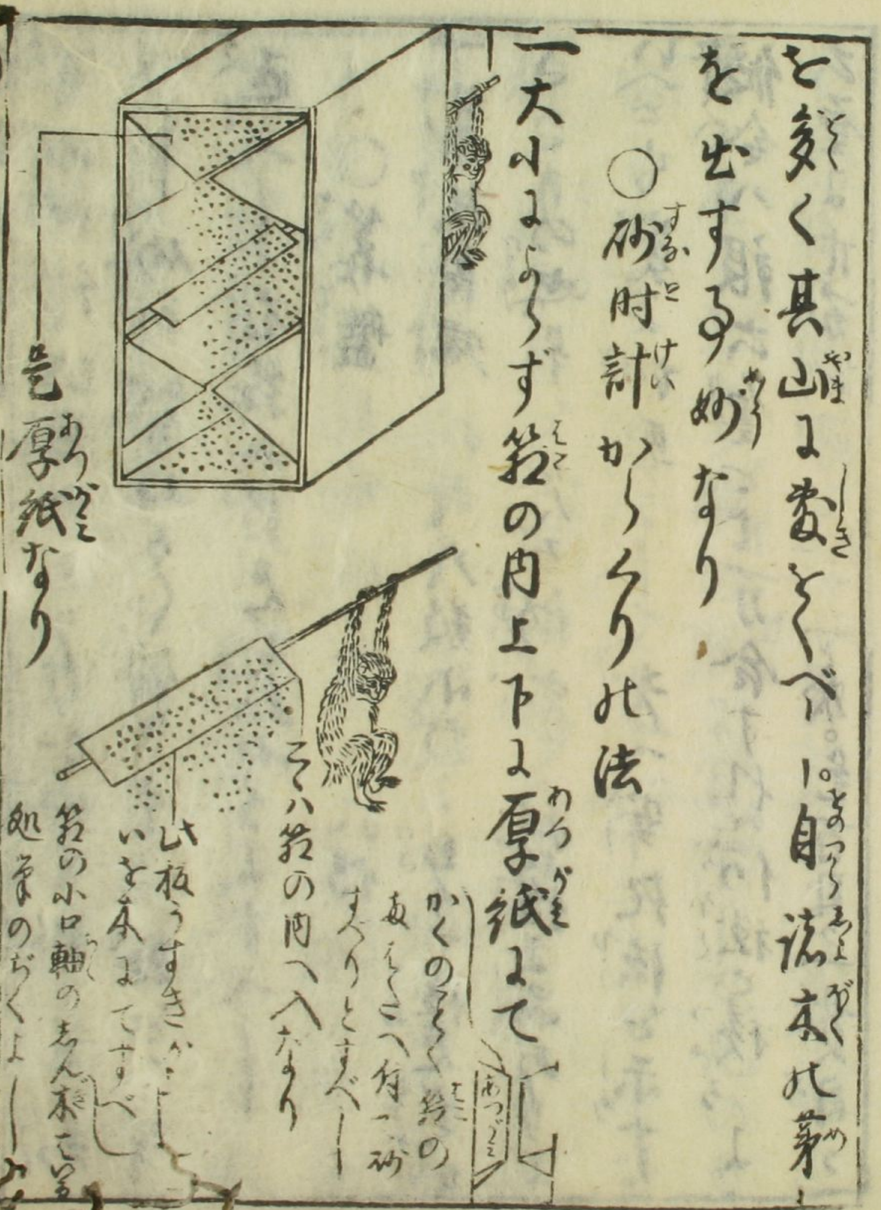
一瓦ノ山ノ木を生さんと欲せバ木を焼る像

を刻く其山ノ麓ノ穴をくべし。自法末此第一

を出するの妙なり

○砂時計かゝらくり此法

一大小ようゝず筋の内上下ノ厚紙ノて



万砂付計に用のあらけをかくはこうり初
べし。砂の勢ゆるくなりてうバ紙をうち
返べし。右紙の用足らぬやうにすべし

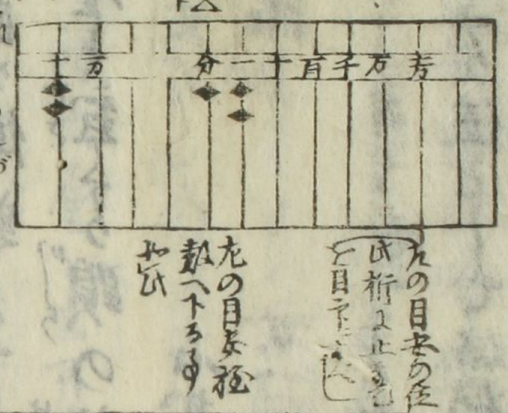
○算盤用帰位足やうれ伝

一算法用帰れ時大数小数よりて位足定が
きりの也。是を考る術。家これは偽よ和ありと
いへども実に切要にして考へ安き法を示す。
假令バ銀六匁と正方合すれバ何程と積るに。
六匁に正方を用て二十二と成。是百目に一貫用ゐ

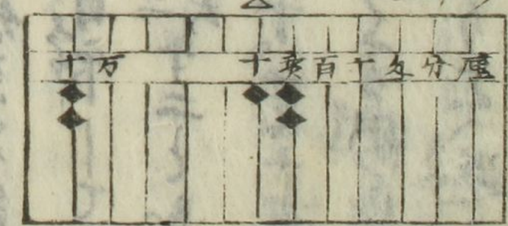
十貫目ゝ位定ゝ是を知るにハ算盤右
に六匁と乗ずる頭の桁に目印して左の目
安に正方と乗ずる右かけ合二十二と成るを
桁の始より下へ分。一。十。百。千。万。十万と目安
此位なと桁を数へ下りて返りて成る桁の面を六匁
と乗ずる位として此桁匁より上へ逆に匁。分。
厘。十。百。貫。十貫。と数止るに無合る桁
十貫の位と見出れバ六匁に正方用て十二貫
目に成ずと考るなり　又右に乗ずる数に左の目安
を用て桁の上数に成ずるあり感

十二二とかける時二ヶ二と桁の下へ移る類ありかやうの時算盤にの下へ拂ずに桁の玉をうち桁の玉のある目安にして先うち分一十と下へ数へ位を定むべし

左の目安を右へ移す図



始上の数のごとく下へ位を数へ

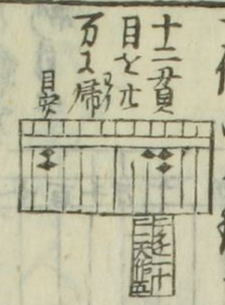


下へ位を数へ

上へ逆よ位を数へ見るべしのごとし

餘ハ准之て考ふ

一低今バ銀十二貫目と比方ハ剩て幾何と見るハ



六と成ハ六厘ハ六分ハ六五ハ位定め

かゝ先を知るハ

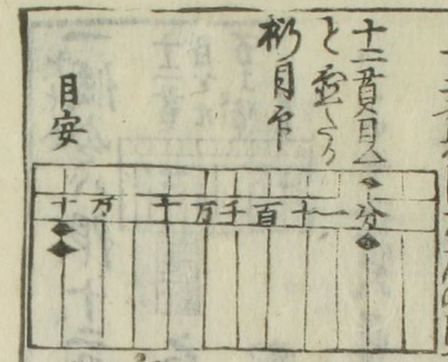
右ハ十二貫目と重ハる頭の桁ハ目下にして左目安ハ方ハて剩バ六しこ成を比始の桁ハり上へ分一十百千万と目安の位ハど桁を数へ上り先ハ桁の而を十貫目と重ハる位ハ

ハて十貫ハり下へ十貫百十五分厘と数へ下るハ六比而重の位ハ桁ハ少へ十二貫目

を古百は帰て古百なりと考るなり又右の重さ目安にて帰て桁のうへへ考る事あり或は三十を二つに割バ二進一十。二天他五。と為て始の桁に而は拘ずに始を重さ桁の重さ目安にして是より分。一十。と上へ数へ位を定むべし

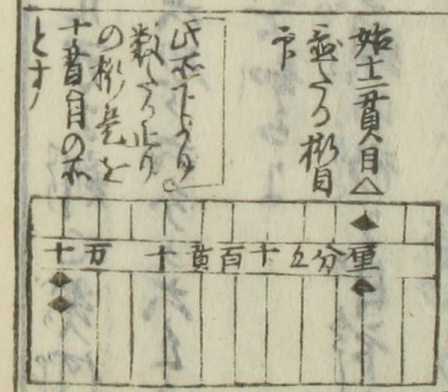
餘準之考へ

十二貫目と左の目安にて割る事



左の目安にて数へ上る事数へ上るすべし

左の目安に位桁は止ろもの目安すべし



始上の事の位と数へ後上へ位と数へ上る下へ数位と見る事如此

○連環の話。人よりて債ヒ。行きの文字より債ヒ。行きとなすを法

一此事を人の考へ出し玉。百十六と百二四とを掛してたとへバ九より加ぞへ九より逆へ九より加ぞへ九より逆へ

仮しに百二四と九の文字を債ヒ

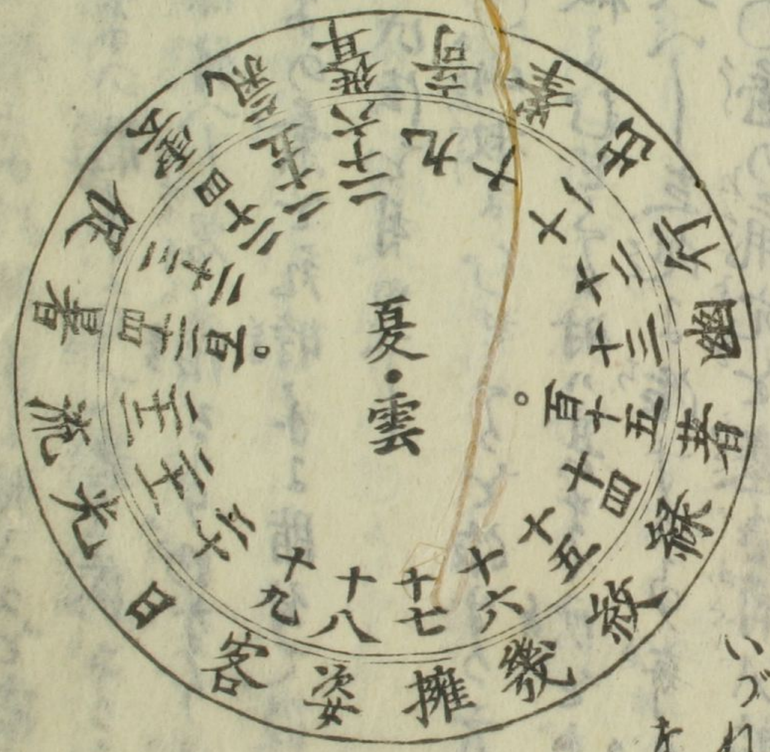
九の文字と定め仮しに一の円にて

の文字と定め　仮しに加ぞへ　をくすり裏文字をふりかへをくべし。是まてが裏へかぞへをくの法なり

是此文字よりとさす法も中の廻るものを動さずよ。十より債ヒ。めバ逆よ十まあ之。

十一かつよりおさハ逆よ十一めれ文字と見な
つとさすべし。但しいつまても百十八と百十四
とくくの書の家結ようり積ても其数かど、
あとへかぞへ。其書る字なり。こかぞへて此
文字と見定め。わざと中れ書まえし
て後に字なりとさする時ひなり。是ハ
られまじきたりなり　百十八と百十四と八其数かど
かぞへねバ其字へ書しぬゆへ。此二つ
なり

連環詩



いづれの字なりとも積べし

四十百となる

○烟草ハ脂ヨリ付ルヲ落ス

一烟草の脂ヨリ付て落ざるハ桐の葉を揉付べし忽落るゆゑ農人畑にて烟草の葉を丸時ヨリ脂付て洗ども落ざるゆゑ此法を用べし

○山椒ヨリむせるを治する方

一山椒ヨリむせるる時ハ其まゝ口中ヨリ入べし立処に治するゆゑ奇妙なり

○瓶の罷穴を塞き再び出ぬ法

一瓶の罷穴を塞ヨリなぐふさぐ時ハ又出る。そのなり。一度ふさきて永く出ぬしやうを土をこねて塞ぎ裏表より。糊をぬるべし

○庵石并盆山ヨリする石其外出入ひづみて墨ヨリなりぬ拘ヨリ墨ヨリ仕やう

一墨ヨリてかやうに墨ヨリ墨ヨリするハ石ヨリても器ヨリても糊ヨリ盥ヨリへ入。傷ヨリそろくとあをつぎ込墨ヨリを切ん思ふ人筋乃而まで多を入。多動止時。其多へ米粧を蒔。粧のこゝろを知さる

をぬくべし。米粉のあと隅々までよゆきとうり
見ぬとかたり

○塗抹の紙を張糊の法

一塗抹の紙をたるよ常之の糊よてたる附き
糊乾けバ長まく光くれるなり。糊の五倍ほ
をねりまぜて張べしめくれず

拾玉動智恵の巻上終